

コーラル・アーツ・ソサイアティ第4回ドイツ演奏旅行記

目次

1. ケルンへ
2. ケルンでの練習
3. クレフェルト「聖ゲルトルーデイス教会」での演奏会
4. ケルン「バジリカ聖アポステルン教会」での演奏会
5. ヒットドルフ「聖ステファン教会」での演奏会
6. リンドラーの自然博物館とオランダの町へ
7. スペインへ
8. ポルトガルへ
9. ロンドン
10. ヴェルディのレクイエム
11. オックスフォード大学に松沢さんを訪ねる

1. ケルンへ

コーラル・アーツ・ソサイアティの第4回ドイツ演奏旅行が去る11月6日（木）に成田国際空港からドイツへ向けて出発し、開始された。

出発当日の午前10時20分、出発ロビーのDカウンターに49名の団員と添乗員の菊池氏、藤崎さん計51名全員が集合、全日空の搭乗受付を済ませトランク類を預けると、一階上にある特別会議室に集まり壮行会が行われた。ここで演奏旅行に当たって注意しなければならないこと、特に外国では置き引きが非常に多いので手荷物は絶対に目を離さないこと、一人では出歩かないこと、グループを離れるときは所在をはっきり伝えておくこと、などを中心とした確認があった。また旅行に当たっての団長をテノールの石原氏とすること、またパート別の世話役をお願いする方を井之脇先生が指名し依頼した。

搭乗するための手荷物とボディーマットのチェックも無事終わり全日空共同運航便NH209便フランクフルト行きに乗った。B747-400型ジャンボジェット機は11時21分に動き出して21分間の移動の後、全長71m、総重量390トンの巨体をゆっくりと持ち上げて一路ドイツ・フランクフルトまでの9500キロメートルの旅に出発した。

稲刈りの終わった北総地方の田園地帯を見下ろしながら約7分で曇り空の雲海を突き抜けて明るい太陽の降り注ぐ青空のもとに出て、10分で高度5千m、15分で八ヶ岳を見下ろす山岳地帯の上空を飛び30分で日本列島を横断して佐渡ヶ島に達した。その後は高度9400m、時速850kmでマイナス52℃の上空を明るい陽光を浴びながら進んでいった。

お茶の時間には私はサッポロのドラフト生ビールを貰って全日空のネーム入りのおかきをかじりながら喉を潤し、昼食にはフランスの赤ワインを賞味しながらコールドミート、チーズとコールスローのサラダ、若鳥の煮物と山菜御飯、日本蕎麦、ケーキ、コーヒーなどを摂った。隣の方は洋風でカレー風味の海の幸のクリームソースを賞味していた。

機は1時間半でロシアの上空に達しツンドラの大平原や切り立った白雪に覆われた山岳地帯を見下ろしながら進んでいった。座席ごとにテレビが付いていて、偶々昔懐かしい小津安二郎監督の映画「お茶付けの味」を鑑賞した。

おやつにはバドワイザーのビールをカルフォルニアの豆をかじりながら飲み、

お握りなどを食べ、夕食にはスモークサーモンと七面鳥、白身魚とえびのトマトソース、日本蕎麦、フルーツなどを摂った。

10時間でストックホルムを越え、ヨーロッパの上に敷く厚い絨毯のような雲海の上を飛んで日本から11時間18分の飛行でフランクフルト空港に無事着陸。荷物なども何事も無く到着し、現地時間の17時5分に2台の専用バスに分乗して夜のアウトバーンを2時間15分疾走してケルンのビジネス街の中心にあるドリント・コンGRESホテル・ケルンに19時20分に到着した。有名なケルンの大聖堂を見晴らす場所にある。

このホテルはビジネスセンター、プール、日本の寿司屋などもある大きなホテルである。夕食用の弁当にハムとチーズのサンドイッチ、オレンジジュースなどが配られて各自部屋に落ち着いた。

ケルンは、ライン河に面したライン地方の文化や工業の中心地で、同時にドイツ有数の古都でもある。ケルンの語源はコロニア、すなわち「植民地」からきているといわれる。その歴史は古く、紀元前50年ころから、ローマ帝国直属のニーダーゲルマニア州の州都として栄えた。4世紀には、すでにコンスタンチヌス帝によって司教管区が開かれ、以来大司教の強い力のもと、大聖堂をはじめ150にものぼる教会が作られ、中世期にはドイツ最大の都市として繁栄した。現在の人口は約百万人、ドイツ第4の都市となっている。第二次世界大戦で町の大部分が破壊されたが戦後再建されている。

ケルンの大聖堂（ドーム）は、ライン河から15メートルの高台に建ち、尖塔の高さは157mある。1248年の起工以来600年の歳月をかけて1880年に完成された。ケルン中央駅前広場から見上げる大聖堂はあまりの大きさと荘厳さに、言葉もなく立ち尽くしてしまうほどである。

私たちは落ち着くとすぐホテルの周辺を散歩に出かけ、日本でもなじみのB E C K S コーヒー店に入った。店は大勢のドイツ人で一杯、それぞれ大きなカップ、日本でいえばLサイズで飲みながら盛んにおしゃべりを楽しんでいた。我々はホテルに戻り22時に床に着いたが、これは日本時間で言えば翌日の朝6時に当たる。丁度一晩徹夜した計算になる。

2. ケルンでの練習

翌朝11月7日（金）は朝早く目がさめて7時からのホテルの朝食にでかけた。すでに何人かはレストランに元気な顔をみせていて、ドイツのハム、ソーセージ、それに果物など自由に取って楽しんでいた。食後にちょっと外に出て小さなコンビニのような店でガス無しの水やドイツのビンビールなどを少し買い込んできた。

初日の今日は指揮者のノイガルト氏による練習日である。8時半にホテルを出発して市内のバジリカ聖アポステルン教会へ出かけた。1642年建立の大きな古い教会で、聖アポステルンが武器を持って悪魔を退治している勇ましい像があちこちに立っている。第2次世界大戦で破壊されたが戦後復興された。この教会の練習室で4年前我々のブラームスのレクイエムを指揮してくれたミュンスター・カントールのヨアヒム・ノイガルト氏によるバッハのマニフィカートの実習が行われた。ほぼ東京で練習してきたことがヨアヒム氏の考え方と一致して概ね合格、一部の手直しで済み練習時間も2時間弱でマニフィカートは終了した。

夕方4時半にバスでホテルを発ってクレフェルトに向かい、1時間10分で聖ゲルトルーディス教会に到着、黄色の落ち葉が美しい町であった。ここでクレフェルト・シェーンハウゼン合唱団とローヤル・ケルン・バロック管弦楽団と合流、マニフィカートのオケ合わせを行った。クレフェルト・シェーンハウゼン合唱団は100人くらいの合唱団でノイガルト氏の指導のもとに歌っている、よく声が出る合唱団だった。オケ合わせを2時間ほど行い終了、明日の演奏会の

成功を約して解散、バスでホテルへ帰って食堂で夕食。地ビールで乾杯して鮭のムニエルをメインディッシュに一日の疲れを癒した。

翌11月8日（土）はマニフィカートの演奏会であるが、開演が夜7時半なので昼間の時間を使ってボンの町を訪れた。ボンはかつての西ドイツの首都であり、大いに発展した町である。ここで1776年にベートーベンが生まれた。この生家がベートーベン協会の手で保存されており現在は博物館となっている。何人かでケルン駅に行き、自動販売機でまずボン駅の番号を探す。ボン駅は2500となっているので、この4桁の番号を入れて料金の5.2ユーロを入れるとキップが出てくる仕組みだ。つり銭も出てくる。こういう仕組みに詳しく、旅馴れているバスの高城氏のガイドで自動販売機を各自操作してキップを買うことが出来た。8時56分発の電車に乗って紅葉の映える町並みを走った。ところが順調に走って4駅目のブリュール駅まできたら、それ以上電車が動かず止ったままだ。ドイツ人は皆電車を降りて行く。よく聞いてみると路線工事で、次のブリュール・ミッテ駅の間は振替バスで運ぶのだそうだ。そこで電車を降りて、待機しているバスに乗り込み今度はバスの旅となった。そして次のブリュール・ミッテ駅に着いてあらためて電車に乗りなおしてようやく1時間20分かかってボン駅に着いた。駅前の広場でベートーベンの銅像を見上げ、ベートーベンハウスを3ユーロ払って見学した。ベートーベンの自筆の楽譜、手紙、デスマスクなどいろいろな遺品が山と展示されている。また一階の売店ではベートーベン関連のグッズが各種売られておりバイオリンのキーホルダーや、ネーム入りのエンピツその他音楽に関するお土産類が豊富である。ここでいくつかお気に入りのお土産を買って11時46分ボン駅発ケルン行きに乗り1時間でケルンに帰った。

3. クレフェルト「聖ゲルトルーディス教会」での演奏会

今日の演奏会に向けて午後3時過ぎにバスでホテルを出発して4時過ぎにクレフェルトの聖ゲルトルーディス教会に着いた。信徒会館でシェーンハウゼン合唱団とバッハのマニフィカートの練習し1時間ほどで終了、引き続いてシェーンハウゼン合唱団の方々が持ち寄った軽食で軽い食事と交流会が開かれた。アルコールこそ演奏前で無かったが、それ以外の飲物・食べ物は盛りだくさんで、それよりも手振り身振りで交流の方に忙しかった。私はバリトンで化学者として水の研究をしている方と自己紹介から始まって仕事の内容まで手振り身振りで説明し合って話し込んだ。

今日の演奏会は入場料は10ユーロであるが通常の演奏会とは違って30分方売れ行きが多く、順調に推移しているとの事で一安心した。

夜7時半から演奏会が始まった。今日は「バッハと私」というテーマでバッハの曲ばかりを集めた演奏会で、「バッハと私」という本（マレテント・ハートという、本職は劇場のマネージャーだった方が書いたベストセラー本）の朗読を曲の合間に入れての演奏会だった。客席は聴衆で一杯だった。

演奏会のプログラムは次のようであった。

1. モテット6番（BWV 230）（J. S. バッハ）

クレフェルト・シェーンハウゼン合唱団

—朗読—

2. オルガン独奏 コラール前奏曲BWV 639）（J. S. バッハ）

トッカータとフーガ、ドリア調d（BWV 538）

（J. S. バッハ）

—朗読—

3.管弦楽合奏 管弦楽組曲第4番d (BWV 1069) (J. S. バッハ)

休憩

—朗読— (ここは特にバッハと死について)

4.モテット5番 (BWV 229) (J. S. バッハ) クレフェルト・シェーンハウゼン合唱団

5.マニフィカート (BWV 243) (J. S. バッハ) コーラルア

ツ・ソサイアティとクレフェルト・シェーンハウゼン合唱団

出演：合唱 コーラル・アーツ・ソサイアティ東京

クレフェルト・シェーンハウゼン合唱団

ソプラノ サビーネ・シュナイダー

アルト ウナ ヴァイン ケンベル

テノール ワルター ドレス

バリトン 小松英典

管弦楽 ロイヤル・ケルン・バロック管絃楽団

オルガン ステファン ベルツ

指揮 ヨアヒム・ノイガルト (ミュンスター・カントル)

朗読 ベルント ホフマン

演奏会は21時40分に終わった。

終了後町のレストランで合同の夕食の交流会が開かれた。双方の合唱団で約100人以上がレストランを埋め、ドイツビールを楽しみながら美味しく食事した。日本から持って行った日本酒を注いで廻ると「ライスワインは美味しい」という声が上がって大いに満足の気分だった。我々は大友氏の指揮で男声合唱で「いざ起て戦人よ」と、混声で「遙かな友に」を歌ってプレゼントし11時半頃までレストランで交流し、ホテルには12時半過ぎに帰着した。

4. ケルン「バジリカ聖アポステルン教会」での演奏会

11月9日(日)は16時からケルン市内の聖アポステルン教会で演奏会が行われるので午前中はケルン市内を散策にあてた。日曜日なのでケルン大聖堂のミサを見学し、ライン河の川岸を静かに散策した。

16時からの聖アポステルン教会での演奏は教会の恒例となっている「日曜の音楽」のプログラムの中でフォーレのレクイエムをコーラル・アーツ・ソサイアティとノイス・ミュンスター合唱団合同の演奏であった。プログラムは次の通りであった。

曲目：～日曜の音楽～

「レクイエム」(フォーレ)

出演：合唱 コーラル・アーツ・ソサイアティ東京

ノイス・ミュンスター合唱団

ソプラノ クラウディア・シュルツ・アルトホフ

バス 小松英典

指揮 ヨアヒム・ノイガルト (ミュンスター・カントル)

オルガン ウルリッヒ・ペーターズ

入場料 無料

教会内は暖房機が故障していてやや寒かったが、聖歌隊席でパイプオルガン

と共に歌うために、聴衆の後ろ側から音楽を演奏する形式なので、コートを着たりして服装にはあまり気を使う必要がなかったために寒い思いは無かった。オーケストラは無かったがパイプオルガンでのフォーレのレクイエムも大変感銘深かった。

5. ヒットドルフ「聖ステファン教会」での演奏会

17時に聖アポステルン教会を出発して専用バスでヒットドルフに向かい、30分でヒットドルフの「聖ステファン教会」に到着した。

ヒットドルフはレーバークゼン市にあり製薬会社のバイエル社が本拠を構える企業城下町で、人口約15万人、ケルンから車で30分の位置にある美しい町である。この中心にある聖ステファン教会は1882年に建てられた、120年の歴史を持つレンガ造りの大きな規模の教会で、立派なパイプオルガンや聖画などが燦然と輝き、その歴史とともに人々の信仰心の厚さと裕福さを感じさせてくれる。

ここでノイス室内管弦楽団、ノイス・ミュンスター合唱団と共に18時10分から約1時間半ほどフォーレのレクイエムのオケ合わせを行い、20時から演奏会が始まった。

演奏会のプログラムは次のようである。

曲目：「讃歌」（グreek） ノイス・ミュンスター合唱団
「レクイエム」（フォーレ） コーラル・アーツ・ソサイアティ東京
ノイス・ミュンスター合唱団
ソプラノ クラウディア・シュルツ・アルトホフ
バス 小松英典
管弦楽 ノイス室内管弦楽団
指揮 ヨハヒム・ノイガルト（ミュンスター・カントル）
オルガン ウルリッヒ・ペーターズ
入場料 15ユーロ

演奏は歌っている我々さえも息を詰めるような緊張感の中で進み、最後の音が鳴り終わるとしばらくは演奏者も聴衆からも微動だにできないような感動が教会の中を駆け巡り、そして我に返ったように拍手が鳴り響いた。21時10分過ぎであった。

終了後小松英典先生からも感動的な演奏だったと非常な褒め言葉を頂戴した。

その後双方の合唱団で膨れ上がった町のレストランで夕食の交歓会が開かれ、ビールで乾杯のあと手振り身振りで大いに歓談した。コーラル・アーツ・ソサイアティからノイス・ミュンスター合唱団の女声メンバーにプレゼントがあり「お江戸日本橋」を我々で歌って23時過ぎにレストランを辞し、専用バスで23時半にホテルに到着、そのままぐっすりと眠りに入ってしまった。

6. リンドラーの自然博物館とオランダの町へ

昨夜の演奏で予定の演奏会はすべてこなし終わって今日からは見学三昧のルンルン気分の毎日が続くことになる。今日はアルトでドイツ出身のクリスティーネさんの案内でケルンから西へ30kmほどの郊外にあるリンドラーのライリッヒ・ミュージアム（自然博物館）を見学することになっている。朝9時5分過ぎにホテルを専用バスで出発、ケルン郊外の丘の間を縫って走り40分で到着。今日は月曜日で休館日のところをわざわざ開けていただいて館長さんの挨拶も伺うことができた。1960年代からドイツも高度成長のひずみで美しい自然を破壊することが進んできて、古い良きものを取り壊し能率一辺倒の風潮が強くなった。そこでかつての農村を復元・保存して次の世代に伝えて行こ

うとこの博物館が1989年にスタートしたという。我々は1960年代のドイツの農家のペーターさんの家を見学した。日本の農家と何か共通するところもあるような自然の佇まいであった。また昔の居酒屋、馬車、農耕馬の飼育牧場、豚小屋、羊の牧場、ロープの製作小屋、昔の駅馬車の体験試乗など、自然を楽しみながら見学した。

昨夜の演奏会を報道してくれた放送局が今日も我々一行を追いかけてきて、自然博物館を見学する姿を取材していた。村の鍛冶屋の前で我々が歌う合唱「お江戸日本橋」を録音してくれた。どのような音でドイツの電波に乗ったのだろうか。

昼食は自然博物館の中のレストランで揃って食べた。19世紀の雰囲気の残る建物で食前のシェリー酒、ウサギの肉、豚肉のロースト、ケーキ、パンそれに美味しいビールで昼食を終えた。ここにも新聞社が取材に来て全員そろって写真を撮り取材していた。

13時50分にここをバスで出発、次の目的地オランダの一番南の町、マーストリヒト町に向かった。バスは速度無制限のアウトバーンを走り、ルトライン・ウェストファーレン州を過ぎて1時間半でオランダのリンブルグ州に入る。同じアウトバーンでもオランダに入ると乗用車120キロm、バス80キロmに速度制限されるので、急にバスのスピードがガタンと落ちるのでわかる。

自然博物館を出て2時間でオランダの一番南の町、マース川沿いの人口12万人のマーストリヒト町に着いた。ヨーロッパ共同体のお陰でオランダに来てもパスポートが不要だから自由に入出入りできて随分便利になった。

この町の見所はオランダで一番古い教会のセルフアーク教会があることだ。古色蒼然としてはいるが格調の高い雰囲気を持つセルフアーク教会はオランダでも最高の遺跡の一つに数えられている。またヤン（聖ヨハネ）教会も17世紀のもので高さ70メートルの高い塔を持っていた。バロック時代の市庁舎も17世紀の美しい様式の建築物だった。

街角の喫茶店でトイレ借用のため飲んだコーヒーは格別だった。

17時半前にバスでこの町を出発し今夜のドイツ最後の夜を全員そろって食べるケルンのレストラン・アルトケルンへ向かった。流石に皆は演奏会の翌日の一日の観光旅行で疲れも出てきたのかぐったりとして座席の背もたれに寄りかかり、バスの運転手さんが冷蔵庫に用意しておいてくれたペットボトル入りの水が飛ぶように売れた。ソプラノの木村さんが販売を一手に引き受けて車内を走り回り水商売に励んだ。お陰で渴きも癒やされて楽しく帰った。

19時過ぎにケルンの大聖堂の前にあるレストラン「アルトケルン」に到着、合唱団そろっての夕食となった。この店は旅行案内書にもお勧めの店として広く紹介されているレストランである。昨日ヒットドルフで演奏した我々のフォーレのレクイエムの録音を聞きながらケルンシュビールで乾杯。ところが最初に出てきたスープが私にとっては塩辛い。特に血压に注意しなければならない私にとっては普段味わったことの無い辛さだ。周りの人に聞いてみたら確かに普通以上の辛さだという。声がだんだん大きくなってウエイターに言うと、早速作りなおしますという返事。そんなことでスープが終わるまで1時間半も時間がかかったが、演奏会も終わりドイツでの観光も終わって、明日からはスペインに観光に向かうグループとドイツだけで帰るグループとのお別れ会としても盛り上がった。胡瓜だけの素材で作ったサラダ、パスタの上に牛肉のシチューを盛った皿料理などを楽しんだ。こうして夜11時過ぎにホテルに帰り、明日の朝の早発ちのために準備だけ完了して早々と床に着いた。

7. スペインへ

早朝4時半のモーニングコールで起こされ朝食の弁当の配布を受けて5時40分にフランクフルト空港に向けて出発した。51名中38名であった。残りの

方はゆっくりと時間を過ごしてから午後に東京に出発する予定である。バスからのだんだん明け行くドイツの朝を見ながら朝食のお弁当を開いた。大きな袋に3種類のサンドイッチとハンバーグ、青リンゴ、オレンジジュースが入っており、とてもこんなにドイツ人並みには食べられないが、それでも美味しさにつられておなかに詰め込んだ。

2時間ほど経っての7時過ぎにフランクフルト空港に到着。旅行社の方が手筈を整えてくれる出国の手続きも40分ほどで整って座席のチケットが配られ、手荷物検査、身体検査、それにドイツでの買い物の免税手続きのある人は免税の書類を出して9時に搭乗口に集合した。9時15分にルフトハンザ航空A320—200型エアバス150人乗りに搭乗した。機は9時45分に動き出して8分間の移動の後全長37mの機体を持ち上げスペインのバルセロナへ向けて飛び立った。

3分ほどで雲海の上に出て太陽の降り注ぐ中を水平に飛行になるとすぐ、朝食になった。お弁当の朝食を食べていたにもかかわらずすぐに手が出てハムと野菜、ヨーグルト、コーヒーなどを口に入れながら1時間半でスペインのバルセロナ空港に着陸した。

空港で荷物を受け取り専用バスに乗るまで1時間、空港からバルセロナ市内まで15分、そして昼食のためにレストラン「ファルガ」に入った。さすがにスペイン風の雰囲気の中に、パンの上に焼きナス、サーモン、アンチョビなどを載せたエスカリバザー、揚げパンの上にトマトとソースをかけたパン・コン・トマトなど珍しい食べ物が並び、手長エビのパエリアなどを興味深く味わった。14時40分にレストランを出たあと、スペインが誇る建築家・ガウディの芸術の鑑賞の旅となった。

ガウディ(1852年～1926年)は有名なサグラダ・ファミリアの建設では知っていたが、バルセロナに来るともっと偉大な芸術家であったことをいやでも知らされることになった。最初にガウディが作ったグエル公園を訪ねて驚いた。ここは計画都市として設計されているが、黄褐色の石を使った傾斜円柱からなる柱廊や蛇のような曲線的なリズム、陶器で作られたベンチ、空想的な色彩豊かな建物など天才としか言いようの無い世界であった。これを15ヘクタールの土地空間を使って都市全体を設計し、現在はバルセロナ市の公園になっている。

次にサグラダ・ファミリアである。1883年にガウディが引き受けたこの「貧民たちの大聖堂」は寄付金のみによって建設が進められ120年経った現在も工事が進められている。この巨大な聖堂を見上げるとき、人間の持つ偉大な創造力と勇氣に脱帽せざるを得ない。そしてその境地に達するまで自己を鍛錬して行った個々の先人に深い敬意を表したい。

また、スペイン広場、モンジュイックの丘にあるバルセロナ・オリンピックの陸上競技場などを感慨深く見学した。

夕方閑静な住宅街に立つプリンセサ ソフィア インターコンチネンタルホテルに到着した。東京の京王プラザホテルと同系列のホテルで、307室の雰囲気の良いホテルである。ホテルの前には自動車の12車線の広い道路が走っている。歩いて5～6分のところにエル コルデ イングレスデパートがあり夜9時まで開いているということで買い物にも便利だ。夕食はこのデパートの最上階の明るく広々としたレストランでスペインのビール、ワイン、サーモンの燻製の大きな切り身などを美味しくあじわった。

翌日はバルセロナの北西60キロの所にある聖地モンセラを訪れた。朝9時に専用バスで出発、山岳地帯をバスがあえぎながら登って行き、2時間40分かかって海拔1235mのモンセラの聖地へ着いた。9世紀から聖地として開かれてきた長い歴史に加え、蛾々とした岩山が覆い被さるように聳えた東洋の墨絵を見るような趣があり、聖なる修行の地としての清浄な雰囲気に満ちていた。

一行は順番に教会の一番奥に安置されている黒いマリア像に手を置いて一人

ずつ願い事をした。また教会の礼拝があり、ここには600年の歴史を持つ少年聖歌隊があり、演奏を聴く暇は無かったのでCDを買ってくるにとどまった。

聖なる山を降り、街に帰ってレストラン「ラ・ポーマ」でサラダ、サーモン、アイスクリームのデザートを味わった。

夕食は全員そろってレストラン「ライロジヤ」でスペイン独特のパンコンソメ、ヌードル入りのサラダ、ムール貝などを賞味した。

食後に夜10時から始まるフラメンコを聞きにフラメンコの劇場、トラントスへ出かけた。30分遅れで始まったが本場のフラメンコは流石に歌といい踊りといい迫力に満ちていた。1時間のショーであったが宵っ張りらしいスペイン人達はその時刻になっても街に溢れにぎやかな通りであった。地下鉄でホテルに帰着したのは夜中の12時を廻っていた。

8. ポルトガルへ

翌11月13日（木）の朝は9時50分にホテルを出発してバルセロナ空港に向かい、イベリア航空IB7692便リスボン行きA320—200型エアバス156人乗りに乗車した。機は13時59分に移動を開始し、14分間移動して13時13分スペインの青空の中へ飛び立った。

すぐに昼食となりセビリアの濃い味のビール、ザグレス・ビールを味わい、ハムと野菜、ムース、果物を摂った。機は時速780kmで飛び、1時間25分でポルトガルのリスボン空港に着陸した。

リスボンは気温17℃、生暖かい天気でまだあちこちに濃い緑を残し、紅葉が始まったばかりの季節だった。空港は比較的閑散としていて人影が少なく、ポルトガルの今日の状況を反映しているかに思えた。ポルトガルの人口1000万人のうち1割の100万人が集中する首都リスボンであるが、素朴な閑静なイメージを与えてくれる。

13時19分にリスボン空港を出発、20分で市内に入り、レストラン「グランドエリアス」に着く。機内で昼食を摂ったお腹にもポルトガルでの初の食事にあらためて食欲が沸いてくる。ジャガイモと海草のスープ、豚肉のソテーとジャガイモ、ライス、果物とアイスクリームのメニューだった。満腹のお腹を抱えて世界遺産のジェロニモス修道院を訪れた。白亜の壮麗な建物で1502年に着工されたものだそう。特に中の回廊は見事であった。インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマの墓もある。

また1515年に建てられた世界遺産のベレンの塔、ポルトガルの海外進出の栄光を記念した発見のモニュメントなども見学した。リスボンの港町を歩いて探訪した後今夜のホテル、「ホテル・アルティス」に到着した。シンプルな内装であるが広い中二階のロビーがあってロビーでゆっくりするには使いやすいホテルである。

夕方ホテルから歩いてリスボンの一角、鮮魚のレストラン街へ出かけた。ずらりとレストランが並んで盛んに呼び込みが行われている。私達は日本語のメニューのある店を選んで入った。メニューを見、ウェイターと相談しながら舌平目、鱈、イカなど4種類の料理を2皿ずつ、ジャガイモやパンなども含めて美味しく食べた。勿論ポルトガルのワインやビールも味わった。帰り道でコンビニのような町の店に寄り、日本人には珍しく見える日用品などをお土産の一部として買ったり、水のペットボトルなどを仕入れたりして街の散歩を楽しんだ。

翌朝は9時35分にホテルを専用バスで出発して45分でヨーロッパの最西端になるロカ岬を訪ねた。高さ140mの崖の上に灯台が立ち、岩を洗う向こう側に大西洋が広がっている。180度の展望でそれこそ地球が円く見える。岬の売店でポルトガルワインを飲みながらしばしヨーロッパの果てを楽しんだ。またこの事務所では最西端に来たことを証明する証書を名前入りで記念に出し

てくれた。

1時間ほどロカ岬を楽しんでからポルトガル王家の夏の離宮があるシントラの町を訪れた。リスボンから電車で1時間の距離にある美しい街である。この町のレストラン「アテンディンハ」で昼食。フレッシュチーズ、サラダ、チキンのグリルなどを食べてから王宮を見学した。14世紀に建てられた夏の離宮でポルトガルの重要文化財となっている。かつて天正年間の頃日本の天正遣欧少年使節が訪れ接待を受けた部屋は白鳥の間と呼ばれ、天井に27羽の白鳥が描かれている。またベルサイユ宮殿を模した鏡の間や音楽の間などかつての華やかな王宮の生活を彷彿とさせた。

4時過ぎに王宮を離れホテルに帰着、夜8時からホテルのレストランで今回の演奏旅行最後の夜のお別れ会を開いた。ホテルの高い階にあるレストランからはリスボンの夜景が見渡せ、ピアノの演奏が静かにメロディーを奏でる中、野菜サラダ、白身魚のフライ、果物などを食べながら10日間にわたる演奏旅行の思い出を語りあった。ピアノ演奏は「出船」や「上を向いて歩こう」などの曲に変わり遙か1万キロメートルを隔てた東京を思い、我々の旅情を誘った。

井之脇先生からは楽しい遊びの時間は今夜をもって終わりとし、これからは音楽の最後のまとめの練習をしますという宣言があり、我々を現実の世界に引き戻した。そして井之脇先生の指揮で「お江戸日本橋」を歌いレストランの他のお客さんの拍手をいただきながら散会した。散会後は部屋に集まって今回の旅行で演奏した「マニフィカート」と「レクイエム」の録音を聴いて比較的うまく歌えた事を喜び合った。

翌11月15日(土)の朝は午後の出発までの時間を利用して9時頃ホテルを出、4～5人で散歩に出かけた。リスボンの街のケーブルカーに乗り丘の上の展望台からリスボンの見納めの展望を楽しみ、ここから町を歩いて古い教会を見学しながら港まで歩いて、市民の台所の7月24日朝市場の雑踏を楽しんだ。丁度折からにわか雨が降り出して急いでタクシーを拾ってホテルに帰着した。

いよいよ帰国である。12時半にホテルを出発、20分でリスボン空港へ出た。我々一行の旅の終わりを慟哭するように、激しい雨がバスから降りる我々に降り注いだ。トランク類も水びたして帰国後点検したら相当雨が衣類等を濡らした形跡があったくらいだった。旅行社の方による出国手続きも手間取って1時間ほど待たされた後13時50分に搭乗手続きが開始され、ポルトガル航空のA319-100ロンドン行きに乗った。全長34m、132人乗りの中型機である。機は14時55分に動き始め5分間移動して15時にリスボンの上空に舞い上がった。

昼食は軽いハムと野菜、フルーツポンチ、デザートで、機は丁度2時間飛んでロンドンのヒースロー空港に17時に到着した。

ここで私と家内、それにテノールの川戸氏の3人はコーラル・アーツの一行と別れてロンドンに留まることになっているので空港で合唱団と別れた。その後一行は19時発の全日空共同運航便で東京へ無事帰着した。我々は3日後の同じ便で帰る予定である。

9. ロンドン

事件はその直後に起きた。ロンドンに滞在することになった我々はイギリスに入国手続きをして飛行機で運んできたトランクを受け取るため空港の回転台の前で待った。次々と荷物が出てきて家内と川戸氏のトランクは出てきたが私のは出てこない。待てど暮らせどだめだった。そして無常にも回転台はもうこれでお仕舞いというかのようになってしまう。あとは引き取り手のない他人のトランクがポツンと乗っただけになった。

仕方なく私は係員らしき人のいるカウンターに行って手振り身振りで事情を言うと、トランクの色、大きさ、形状などを聞かれ書類にして、滞在するホテルの

名前を告げてとりあえずお引取り下さいということになった。今夜は身のまわり品無しで過ごさねばならないとあきらめてタクシー乗り場から英国特有の黒の四角い、向かい合わせに座席があるタクシーでロンドン市内に向かった。

30分ほどで目指すホテル「ザ・プラザ・オン・ハイドパーク」に着いた。ところが運転手は首を傾げて「ホテルの名前が違っている」という。よくみると建物の玄関には大きな字で「コルス・ホテル・ハイドパーク」と出ている。ちゃんと予約していただいているホテルだから間違いは無いはずだが、と困惑した。丁度その時ホテルの前でタクシー待ちしていた日本の若い女性の2～3人連れの方が窓から顔を出して「このホテルは一週間前から名前が変わったらしいですよ」という。それなら間違いないということで我々はタクシーを降り50ポンド(約1万円)のタクシー代を払ってホテルに入った。

コルス・ホテル・ハイドパークは最近経営が変わったホテルのようで、ハイドパーク公園の前に位置し、400室の大きな都市型ホテルである。ローラ・マリーという高名なデザイナーによるデザインで客室が統一されているが、クラシック過ぎるところがあって使い勝手はあまりよくない。第一にホテルを説明した案内書が無い。普通どのホテルでもあるエンピツやレターペーパーが無い。従って電話のかけ方がわからない。別の部屋に居る川戸氏と電話で連絡しようといういろいろ試行錯誤したが結局オペレーターを呼び出してつないでもらうということが判った。またオックスフォードに居る松沢さんに電話をするのにいろいろ間違いがあつて2日後にチェックアウトするときには電話代が40ポンド(8000円)にもなってしまった。部屋に冷蔵庫も無かった。物を仕舞う引き出しなども無い。

ロンドン総じて物価が高いようである。こういうホテルでも一泊シングルで2万円を支払った。部屋のチップは1ポンドコインを置いてこれは日本円で200円に当たる。ロンドンの中心部ピカデリーサーカスへハイドパークの前にあるこの

ホテルからタクシーで行くと片道15ポンド(3000円)はする。レストランで食事をするると大体20ポンド(4000円)くらいになる。しかし逆に言えばこれくらいのお金が払えるのは経済的に恵まれているからなのであろう。逆に大英博物館のような巨大な宝庫というべきものがタダで自由に出入りできるのだから立派と言わざるを得ない。然し一般庶民の懐は目減りして暮らしが苦しくなっているようだ。インフレが進んで庶民を圧迫しているのかもしれない。

さてその晩は日本料理でも食べようということになって、「地球の歩き方～ロンドン篇」に載っていた日本食レストランに場所を聞くために電話を入れた。然し1軒は英語で受け答えしか出来ない、日本語を話す従業員が居ないということで、ここはイギリス人だけで運営している日本食のレストランだということがわかった。しかしレストランの場所を日本語で聞くことはかなわなかった。そこでもう1軒の日本食レストランに電話してみたら、ここは電話会社の声で「電話番号を調べ直して下さい」という返事が返ってくるばかりで、あるいはもう店を畳んでしまったのかも知れない。そういう訳で結局日本食はあきらめてピカデリーサーカスの繁華街にある中華料理店での久しぶりにヨーロッパスタイルの料理から逃げ出した一夜であった。夜遅くても英国人で繁華街は大賑わいであった。なかなかつかまらないタクシーをやっと捕らえてホテルに戻って夜中の12時となった。部屋に戻ると空港から今日見つからなかった私のトランクが部屋の真中に鎮座していた。

翌日はロンドンの名所大英博物館、ウェストミンスター寺院そしてバッキンガム宮殿の3ヶ所を見て夜はコンサートを聴くという予定である。まずホテル近くのヴィクトリアゲート駅で地下鉄の一日乗車券を購入する。空いている自動販売機にお金を入れて操作したがキップは出てこない。つり銭切れで出ない

のだ。日本ではまずこういうことは無い。万事おおらかなのがヨーロッパの特徴だから仕方が無い。そこで列を作って人だかりのしている窓口に並び直して1枚4. 1ポンドの一日キップを購入。

地図を頼りに地下鉄の乗換えをしながらヴィクトリア駅に着き、ここから街を歩いてバッキンガム宮殿へ。今日は特別の行事でもあるのか、宮殿の前は大勢の市民で一杯。騎馬警官があちこちに出て警備している。宮殿の前庭では衛兵の行事をやっていると見えて集団で動く物音がする。待っていれば門を開いて衛兵が出てくるかも知れないが時間もないので、宮殿を後にしてウエストミンスター寺院に向った。ここは相変わらず秀麗な姿をみせて立っていた。寺院の傍らでは遠くから巡礼にでも来たのであろうか、若い20人くらいの男性が指揮者を囲んで寺院の庭で男声合唱を歌い始めた。中々きれいなハーモニーで訪れた人たちも足を止めてしばし聞きほれていた。このウエストミンスター寺院からはすぐ後ろに英国議会とビッグベンがテムズ河畔に聳えているのがよく見えた。

そしてここから地下鉄に乗り大英博物館へ向かった。

大英博物館は無料で自由に見学できる。まずカフェテリアに入って腹ごしらえをする。まずは古代エジプト、メソポタミアの遺品の展示から見学する。大英帝国の威信にモノを言わせて集めてきたと思われる超一級の古代の遺跡・遺品が展示場狭しと陳列されており流石大英博物館と感嘆せざるを得ない。これだけの展示品すべてを鑑賞するには一週間はロンドンに滞在する必要があるなど感じつつ、後ろ髪を引かれる思いで大英博物館を後にしてホルボーン駅から地下鉄でホテルに帰着した。

10. ヴェルディのレクイエム

当日の夜7時からロイヤル・アルバート・ホールでヴェルディのレクイエムが演奏されるので、着替えてホテルを出た。タクシーでホールに着くと予約しておいたチケットはすぐに手に入った。料金は25ポンド(5000円)。指定された席は前から6列目の正面。ホールは2千人は優に入る大きな建物で、カーテンを引いた個室が並び、その上にいわゆる天井桟敷の見上げるような高い場所の観客席もあった。いわゆるオペラでよく見るスタイルである。ステージ中央に巨大なパイプオルガンが聳えている。プログラムはステージの端のところに男性が立っていて、そこへ出かけていって買ってくる形になっている。1冊5ポンド(千円)

合唱団は約600人はいたであろうか、15の合唱団が共同して歌っている。それぞれの合唱団の名前をみると「コーラル・・・・・・ソサイアティ」という合唱団名が多い。丁度我々の合唱団名と同じようなつけ方である。あらためて我々の合唱団のネーミングはこういう、いわば先進の合唱団のネーミングと合致しているのだなと改めて認識した。管弦楽はウエストミンスター管弦楽団。

600人の合唱の音はヴェルディのレクイエムとおもえないような音楽をさらに雄大に聴かせてくれる。しかし雑音というような音ではなく抑制の効いた聞きやすい発声法でこの曲の音楽性をよく表現していた。

中間の休みでは英国紳士連に混じってビールを飲んで一休み。要所に立っている人の募金袋にも多少の喜捨をしてレクイエムを終わりまで堪能した。

帰りはバスと地下鉄を乗り継いで無事ホテルに帰った。ホテルのバーで軽い食事を済ませてロンドンの2夜目を過ごした。

11. オックスフォード大学に松沢さんを訪ねる

ご主人がオックスフォード大学で研究されることになったため東京バツハ合唱団を休団され、英国に住まわれている松沢さんのお宅を訪ねた。11月17日(月)朝ロンドンのヴィクトリア駅をオックスフォード行きのバスで発って約

1時間半、牧草に群れる羊や牛などの田園風景を眺めながら終点のグロスター・グリーンで下車し松沢さんの懐かしい笑顔に触れることができた。

オックスフォード市は人口144千人の、12世紀からローマンカトリックの修道院を中心に発達してきた町で、現在人口の20%は学生からなる、ケンブリッジと並ぶ学問の都である。それぞれの修道院がカレッジになってきた歴史の変容の中で、39にも及ぶカレッジに学生が属しそれと同時にオックスフォード大学という総合的な組織で学ぶ総称をオックスフォード大学という、他の大学とは違う組織となっている。各カレッジに入学するにはそれこそ選りすぐった学生が試験を受け、面接を経て合格をするという難関を突破して入学を許されるエリート大学である。ご主人はペンブロック・カレッジに属しておられる。

お二人が住まわれるのはバンベリー・ロードという、ドン・ズ・ハウスといわれていた邸宅が並ぶ一角で、120年前のヴィクトリア王朝時代に建てられた3階建てのレンガ造りが並んでいるところである。カレッジの先生方をドンと呼び、その方々が歴史的に住まわれてきた場所なのでドン・ズ・ハウスと呼ばれている。1区画が約千坪の広々とした敷地の中の大きな建物で、6家族が借りておられ、その1階がお二人の住まいである。

我々はそこから丁度四つ角をはさんで筋向いの、同じドン・ズ・ハウスがホテルとなっているパークランドホテルに宿をとった。瀟洒な清潔感のあるホテルである。何よりもお二人の家の目の前というのが便利である。

お訪ねしたのは丁度昼前で、これから大学へでかけるご主人共々こころ尽しの昼食を頂いた。ここに住まわれて丁度2ヶ月になりまだ色々と落ち着かない状況もあると推察されたが、大変元気ですっかりこちらの生活に溶け込んでおられる様子だった。松沢さんもこちらの合唱団に入られて現在バッハのクリスマス・オラトリオを練習しておられる。約130人の団員からなる合唱団「オックスフォード・ハーモニック・ソサイエティー」で毎週火曜日の夜7時半から9時半が練習である。来る11月29日（土）町の中央にある千人収容のタウンホールでクリスマス・オラトリオIⅡⅣⅥを英語で演奏する予定となっている。また来年4月3日（土）にはヴェルディのレクイエムを、6月19日（土）にはフォーレのレクイエムを演奏するというスケジュールで、なかなか盛んな合唱団である。

早速松沢さんの案内で有名な本屋さん「ブラックウェルズ」やオックスフォードで一番きれいな中庭を持つセントジョーンズ・カレッジを案内して頂き、昔の修道院の雰囲気が残る歴史に思いを馳せた。そしてイギリスで一番古いコーヒー店といわれるクイーンズ・レーン・コーヒー・ハウスで雰囲気のある佇まいを楽しみ、続いてニュー・カレッジのチャペルで開かれている公開の夕礼拝に出席した。午後6時15分から約30分の音楽礼拝であるが、13人の大学生が指揮者のもとパイプオルガンの伴奏で男声合唱による応答形式のグレゴリア聖歌を歌うのであるが、まことにきれいで、しかも選りすぐられた学生らしい、引き締まった容貌に見とれているうちに礼拝が終わった。最近は学生の出席が少なくなっている傾向にあるようだが、このような伝統が受け継がれているのも素晴らしいことだと思う。

礼拝が終わって夜のオックスフォードの町を散策してからスコットランドの海鮮料理店ロッホ・ファインでスコットランドのビター、デッカーズビールを味わいながらムール貝、ポテトのスープ、生牡蠣、カニ、エビ、シーバスなどを賞味した。店の雰囲気もサービスも流石親切なスコットランドだなと感心した。

翌日は午前中の時間を利用してカレッジの中で一番大きな規模を持つクライストチャーチ・カレッジを見学させていただいた。15世紀の修道院の佇まいがいまだに残る大きなカレッジで、教会の規模も大きく、丁度先生・学生の昼食の準備が進むホール（食堂）、売店なども見学した。そして昼食は有名なパブ、

創立は1650年（この店では「ナルニヤ物語」のC.S.ルイスや「指輪物語」のトルキーンがよくここで語り合った）という「イーグル・アンド・チャイルド」でビールを楽しみながら歴史を経てきた昼食のメニューを味わった。

こうして短い時間であったが松沢さんのお忙しい時間を割いていただき有意義な時間を過ごさせて頂き、元気な姿にも接することができた。

松沢さんに見送られて14時にバスターミナルを出てヒースロー空港行きバスにシニア料金で7ポンド払って乗車し、1時間15分で空港の3番ターミナルに到着。東京行きが発出する3時間前に搭乗受付を始め、予約券とパスポートを見せて座席番号の入った搭乗券を貰う。そして手荷物と身体の検査をパスすると中に入ることが出来る。まず免税手続きの窓口に行って書類を提出して検印を受け、これを封筒に入れてポストに投函して、これで免税処理は終わり、あとは免税店で買い物をして出発を待った。

全日空共同運航便NH202便東京行きB747-400型ジャンボジェット機は18時57分に動き出して、余程空港が混雑しているのか35分も空港内を移動してから19時32分によりやくイギリスの夜空に飛び立った。機はヘルシンキ、ワルシャワを通過して3時間でモスクワの北方、高度1万¹、気温マイナス60℃の上空を時速920kmで飛んで行った。

夕食はスモークの鶏肉とツナとパスタのサラダを前菜に、サーモンのクリームソース、蕎麦とデザートを食べてゆっくりと休みながら日本に向かった。

機は次第に速度を上げ、飛び上がって4時間後にはシベリアのウラル山脈を時速1000kmで越え、8時間後は時速1050kmの速度でほぼシベリア大陸の横断を終わり、10時間50分の飛行の後15時23分に無事成田空港に到着した。